

## 特集 基礎学力の育成

英語教育における  
基礎学力

高橋 貞雄 (玉川大学)



## 1. 基礎・基本はなぜ重要か

平成14年に施行された外国語の学習指導要領の柱は「実践的コミュニケーション能力」の育成である。この目標を達成するために、言語の知識を身につけるだけでなく、場面に応じて適切に言語を運用することに重点が置かれるようになった。そのために授業においても、実際にことばのやりとりをするコミュニケーション活動が重視されるようになってきた。こうした傾向は、『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』および『同行動計画』によって、ますます拍車がかかっている。では、子どもたちの英語コミュニケーション能力は着実に向上しているのだろうか。最近になって、「学力不足」がクローズアップされたのはなぜだろうか。簡単にいえば、英語の力が思ったほどついていない、低下している、ということが明らかになってきたということではないだろうか。最近多くの自治体で、「ゆとり教育」から「学力重視教育」へ向けてさまざまな政策を講じる動きがある。たとえば、1年2学期制、習熟度別授業、少人数制授業などである。また、6・3・3制の見直し、小学校の英語教育の取り組み、教育特区など、行政面からの教育改革も進んでいる。

では、英語教育についてはどう考えていけばよいのだろうか。とりわけ、本格的に英語教育（子どもたちの視点で言えば英語学習）に取り組むことになる中学校のあり方について、改めて考察してみたい。承知の通り、今回の学習指導要領において、英語は事実上の必修科目になっている。ということは、すべての生徒にとって必要な英語教育を行うということである。中学生は子どもから大人へと成長する過渡的な段階にあり、その多くが高等学校や高等教育

へと進んでいく。この重要な発達段階にある中学生に対して、私たちは英語教育を通して何を保証すべきなのだろうか。

英語教育には、言うまでもなくさまざまな目的がある。たとえば、コミュニケーション能力の育成、メタ言語教育、異文化教育などである。そして忘れてはならないのは、英語教育は言語教育であるということである。言語教育はもちろん国語教育でも行うわけであるが、外国語教育としての英語教育も「ことばの教育」としての責任を担っている。国語教育とともに、英語教育を通して子どもたちの「言語力」を育成するという責任である。「言語力」は、他の教科においても、思考力という点においても、コミュニケーションという点においても根本的な能力である。

そこで当然の帰結として、英語教育を行う場合に英語の根本を、つまり基礎・基本をしっかりと教える必要があるということになる。英語の基礎・基本を学ぶということは、英語には日本語とは異なる「音」や「文法」のしくみがあること、コミュニケーションの仕方に違いがあること、といった根本を身につけることである。基礎・基本の学習を続けていけば、「基礎学力の向上」へとつながり、それはとりもなおさずコミュニケーション能力を高めることにつながる。コミュニケーション能力については1980年ころから盛んに研究が行われている。そのほとんどの研究において、コミュニケーション能力の要件の最初にあげられるのは「文法能力」である。もちろん、英語の文法もできるだけ自然な英語のやりとりを通して身につけるのに越したことはない。しかし、多くの中学生が置かれている環境は、週3時間での英語の学習である。この限られた状況では、しっかりと「学習」や「気づき」を与えずして

基礎・基本が身につくとは思えない。つまり、基礎・基本の教育を行わずして「基礎学力」の保証はできない、ということである。

## 2. 教科書で保証する基礎学力

教育は、教育を受ける主体である生徒、教育を行う教師、そして教育の素材となる教材の連携において成立する。ここでは「基礎学力」を保証するという観点から教科書で何ができるか、また何をすべきかという点において2006（平成18）年度版 *NEW CROWN*（以下、18NC）の考え方を述べておきたい。

使い古されているかもしれないが、「教科書を教えるのではなく、教科書で教えるのだ」という言葉がある。教科書はあくまでも教育の素材であり、教育のすべての責任を担うわけではない。しかし、教科書には題材から言語材料、言語活動にいたるまで編集者の教育観が反映している。当然、英語教育の基礎・基本をどう考えるか、という観点も教科書に反映している。*NEW CROWN* は従来から4技能のバランスを重視し、英語の基礎・基本を大切にしてきた。18NCにおいては「中学生に基礎学力を保証する」という観点から、あらためて英語の基礎・基本を点検し、その修得の方法まで踏み込んだ教材として提案することにした。

では、英語の基礎・基本とは何か。さまざまな答えが予想されるが、多くの人が一致するのは語彙と文型・文法である。ここでは、この2つを代表的な例としてNCの基本的な考え方を紹介しておきたい。

### ① 語彙

語彙は非常に重要であり、コミュニケーション能力の要でもある。承知のように、中学校の教科書に載せる語彙は900語程度ということになっている。そのうちの100語が必修語である。そこで18NCでは学習の効果や活動のしやすさを考慮し、複数のコーパスを利用して500語を基本語として選定した。これがNCが考える語彙に関する基礎・基本ということになる。基本語は、話したり書いたりできることを目標とする語として、教科書に太字で示している。その他の語は、理解語と話題語に区別し、前者は読んだり聞いたりして理解できることを目標

にする語として、並字で示している。後者は特定の題材との関連で理解できることを目標にしており、網掛けで日本語訳を付している。基本語の詳しい扱いについては、本誌特集の「生徒の語彙力を伸ばすために」を参照していただきたい。

### ② 文型・文法

中学校で扱うべき文型・文法は学習指導要領に明記されているが、その扱いは教科書に任されている。NCは従来から文型・文法をその提示順序から付録の扱いにいたるまで重視してきた。文型・文法が基礎学力という観点で欠くことのできない要素だからである。コミュニケーション能力という点でも文法が重要であるということはすでに述べた通りである。そこで18NCでは文型・文法をどのように扱っているかについて基本的な考えを説明しておきたい。

まず、学習指導要領に盛り込まれている文型をすべて同レベルで扱うことをしていない。それは基礎・基本という観点で効率的ではないからである。NCの選定・配列基準の1つは「学びやすさ・教えやすさ」である。特に週3時間のような限られた時間のなかでは学習は効率的に、しかも体系的に行われる必要がある。2番目の基準は、「文法性」である。文法の基礎・基本は何かを考えたときに、文法を精選する、という考えに行き着く。たとえば、数、人称、三単現、助動詞、進行形、時制、完了形などは英語の文法の根幹をなすものである。このような基本的なものは、文法のPOINTとして出し、しっかりと学習してもらおう。一方で、Where is ~? や When do you ~? などの文型は、一度 What is ~? のようなWH構文を学習したあとは、一種の表現として「使いながらの学習」に委ねることになっている（DO IT—TALKで扱っている）。言語習得理論によれば、学習には「体系学習」（system learning）と「項目学習」（item learning）があり、両者が有機的に統合して言語が習得されるという。NCの文型・文法の扱いは、このような言語習得理論も参考にしている。

## 3. *NEW CROWN* の活動と学びのスタイル

現在は教授法不在の時代であると言われる。確かに、多くの現場の先生方との交流を通して、多種多

様の授業観や教え方があること、そして教科書がさまざまな活用のされ方をしていることがわかる。そのようななかで、18NCの教科書構成の基本的な考え方として、以下の2点をあげることができる。1つ目は、特定の教え方に縛られないことである。つまり、授業案がひとつしかできないような教科書では困るということである。先生方のティーチング・スタイルに合わせて柔軟に対応できる教科書でありたいと思う。2つ目は、逆にどのように教えたらよいかわからないような教科書でも困るということである。教科書は、基礎・基本から応用・発展的な活動にいたるまで、一定の教授理念・授業観に基づいて作成されている。したがって、教科書に沿って授業を行えば、一定の成果をあげることができる、つまり確実に基礎学力をつけることができるようになっていなければならない。18NCではそれぞれの活動のねらいを視覚的にも明確にし、教科書に沿って授業を行えば基礎的な学習が確実に行われるように配置している。

以下では、基礎学力を育成するという観点から教科書のいくつかの活動を例にあげてその考え方を説明しておきたい。

#### ① 基礎・基本を修得する活動と定着させる活動

18NCでは「聞く活動から話す活動へ」という言語の基本的な学びのスタイルを重視している。その代表的な活動が各セクションの下に4つの絵をもとに展開されるCHECK ITの活動である(p.5参照)。ここでのポイントは基本文の意味がすべて「絵」で示されているということである。生徒はまずその絵を手がかりにして、聞こえる英語の意味を理解する(使用される単語はすべて既習語である)。次に、今度は耳で理解した構文を使って英文を口に出して言う活動を行う。これはいわば「耳慣らし、口慣らし」の活動であり、ほぼ機械的に行われる活動である。ポイントは意味が「絵」で表されていることであり、それが日本語訳を介さずに理解したり表現したりする助けになるということである。英文を聞いたり読んだりして「わかる」ということは頭の中でその意味が「絵」のように描けることであり、英文を言ったり書いたりするときには、頭に浮かぶ

「絵」を言葉にかえて表現することである。CHECK ITのような基礎的な活動であっても、これを積み重ねていけば、自己表現能力、コミュニケーション能力の育成に必ずつながっていく。

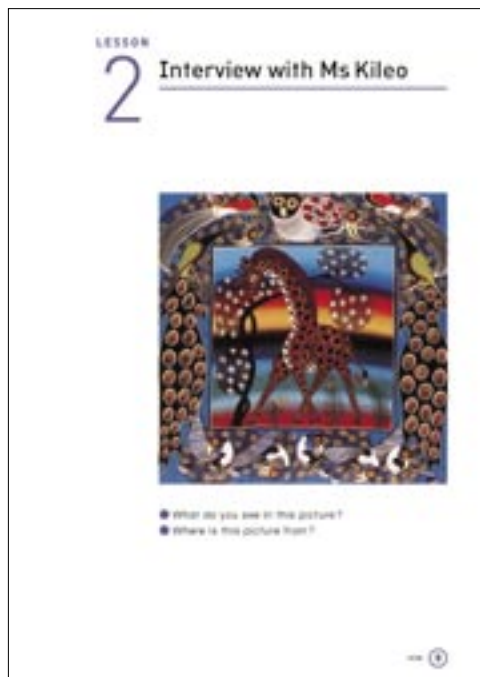
次に基本文を定着させる活動としてUSE ITを配置した。この活動は本課の最後のセクションの後に置かれている。ここではCHECK ITですでに基本文の基礎的な理解が得られているので、その基本文を用いてよりコミュニケーション的な活動を行うことがねらいである。USE ITでは、話す、聞く、書く、といったそれぞれの技能の修得に重点を置きながら、

- 1) 意味がある活動
- 2) インタラクションがある活動
- 3) 自己表現がある活動

という3つの基本をもとに内容のある実践的な活動を用意している。

#### ② 音声・音読を重視した活動

18NCでは音声・音読能力を重要な基礎学力として位置づけている。「音」にかかわるスキルは、リスニングにおいても、スピーキングにおいても、大変重要である。音声の学習を集中的に行うのが、各課のUSE ITの最後にあるSOUNDSである。ここでは学年によって段階的・発展的に学習できることを意図してさまざまな活動を配置した(具体的な活動については、本誌特集の「気づきを重視する音声指導」を参照していただきたい)。また、音声指導の観点から本課の例文についても、当該ページの下段に音声アドバイスを設け、強勢、イントネーション、チャンク読みなど、随時発音上のアドバイスをを行っている。また、暗誦・音読にふさわしい教材がほしいとの要望に応じて、音読練習を想定した題材も意図的に配置した。たとえば、2年生の読み物教材であるZorba's Three Promisesを見ていただきたい(p.12参照)。この作品は第一義的には、感動的読み物、楽しい読み物、という位置づけであるが、そこには意図的に会話文を取り入れている。それぞれの発話の意味をよく理解し、気持ちを込めて音読することによって、物語の醍醐味がいっそう増すことになる。音読練習は、音と意味が一体であることを学びきわめて基礎的な、かつ重要な活動である。



### ③ 気づきを与え、考えさせる活動

学習は、教師が一方向的に教えるだけでは成立しない。また、無味乾燥な言語の操作練習をするだけでも学んだことが定着しない。つまり、生徒に学習の動機を与えたり、学んだことのフィードバックを促すことが重要である。要は、生徒が主体的に学び、主体的に考えるような活動を提供することである。ここではそういう観点から2つの活動を紹介したい。

1つは、各課の扉のページに配置された活動である。ほとんどが写真や絵と簡単な質問文で構成されている。私たちはこれを「プレ活動のページ」と呼んでいる。ここで主として意図していることは、生徒の興味関心を促し、題材に取り組む動機を与えることである。授業では、これを基にしてオーラル・イントロダクションを行ったり、生徒からさまざまな発話を引き出すための素材として活用することができる。また、すべての「プレ活動のページ」には、4、5文からなるリスニング・スクリプトを用意しており、CDをかけるだけでも活動が成立するように工夫している。当然、リスニング力の育成にも効果的である。

もう1つは、各課の最後にある THINK ABOUT IT の活動である。ここではそれぞれの課で学んだことの要点をまとめたり、印象に残ったことを書き

出したりすることを意図している。学習を振り返り、自分の言葉で整理したり、まとめたりする活動は、学習の定着という点でとても大切である。最近、書くことの学力が低下していることがあちこちで言われているが、少しずつ書かせることによって、書くことの表現力が育成されることを期待している。最近、英語力を養成するために注目されている活動に Journal writing があるが、THINK ABOUT IT もそれに類似した活動である。

### 4. 三位一体の教育：まとめにかえて

今もっとも重要なことは、未来を担う子どもたちによりよい教育を提供することである。そのひとつとして「基礎学力を保証する」というのが今回の提案であり約束である。教育は多くの人の支えと協力によって成り立つ。もっとも大切なのが教育の主体である子どもたち、次に重要なのが教育を直接行う教師、次に教科書や補助教材などの教育の素材を提供する裏方。私たちが授業を支えるサポーターとして「人づくり」の一端を担うことができ、NEW CROWN で学ぶ子どもたちが豊かな言語力を身につけ、国際性豊かな大人に成長してくれることを心から願っている。